HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	野本和幸 『フレーゲ入門一生涯と哲学の形成』（勁草書房）
Author(s)	長谷川, 吉昌
Citation	哲学, 40, 73-80
Issue Date	2004-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35022
Type	departmental bulletin paper
File Information	40_RP73-80.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《書評》

野本和幸
『フレーゲ入門――生涯と哲学の形成』（勁草書房）

長谷川　吉昌

本書の内容を一言で語るなら、表題が示すとおりフレーゲの生涯とその哲学の形成過程とを、近来の新史料を活用しつつ論述・紹介した入門書ということになる。

全体の結構を目次から確認すると、フレーゲのもたらした現代哲学への影響をごく手短に解説した第一章および最終章と、第二章「フレーゲの業績概略」および第三章「フレーゲ小伝」を除いては、論述はほぼ時間経過の順序にしたがっている。

以下の点がまず目を引く。フレーゲの全キャリアのうちで、論理学史上の画期をなす最初の著書『概念記法』（一八七九）から『算術の基礎』（一八八四）を経て『算術の基本法則』第一巻（一八九三）および第二巻（一九〇三）の公刊とラッセル・パラドクスの劇的な発見（一九〇二）に到る時期については、全十八章中の七章（七章から十三章まで）で扱われているにすぎず、その前後の時期にかなりの分量（本書全体のほぼ三分の一ほど）が割かれている。より正確に言えば、『概念記法』の出版に先立つ「修業時代」を含めたフレーゲの青少年時代の叙述に四章から六章までの三章が費

やされており、さらに『算術の基本法則』第二巻出版以降のフレーゲの円熟期に十四章から十七章までの四章が費やされている。とくに後者の時期については、算術の基礎づけに関するその後の思索や、カルナップへの影響（十五章）、ヴィトゲンシュタインとの関係（十六章）、最晩年の極右化傾向とナチズムへのスタンス（十七章）など、本書に関連して論じられるべきことがらも多い。

これら二つの時期については、「まえがき」で著者が述べているように伝記的事実を伝える歴史資料の発見と公表によって近年研究が進展しているとはいうものの、概してフレーゲ研究者は従来あまり注意を向けてこなかったきらいがある。研究者たちの関心が前記の主要著作が公刊された時期に集中することにより、いわば三主著を中心に遠近法的に誇張されたフレーゲ像がおのずとできあがることになる。本書はこのいびつさを是正しバランスのとれたフレーゲ像を描く先駆的な試みとも言えるが、その結果として、これらの時期に挟まれ、研究成果の蓄積がもっとも厚いフレーゲの働き盛りに関しては、分量から言うと本書全体のほぼ半分ほどを占めるものの、相対的にやや駆け足の論述となったのはやむをえないところであろうか。というのも、本書は四六版一段組みで本文二六六頁とさほど大部の書物ではないにもかかわらず、盛り込まれているトピックはきわめて豊富だからである。膨大なと言ってよいほどの情報を限られた紙幅のなかでコンパクトにまとめ上げる手際のよさは著者の論述に特有のスタイルであるが、本書においても伝記的事実に関する詳細な報告とともに、哲学思想史、論理学史、数学史、政治・経済・文化史などのさまざまな視点からフレーゲの生涯と業績を多面的・重層的に描き出すことに成功している。したがって、フレーゲの学術的な業績に関することがら以外にも本書の読みどころは多数あり、とりわけフレーゲの内面に肉薄すべく著者が丹精込めて描き出すフレーゲの生涯は読者の胸を打つことだろう。

他方で、フレーゲの講義一覧や遺稿集・書簡集公刊の経緯、著者の留学体験および海外フレーゲ研究者との交遊録などといった、読んでいて比較的肩のこらないコラムが本書の随所に挿入されており、読者を飽きさせない工夫もなされ

ている。ただし、このような工夫にもかかわらず、フレーゲの学術上の業績を解説する場面では情報密度がきわめて高いため、専門的知識をもつ研究者に対してはきわめて効率のよい情報伝達が可能となる一方で、予備知識をもたない読者に対してはあるいはその理解を妨げるかもしれないと懸念される。どのような読者層に優先的に配慮すべきかは一概には言えないが、「入門」と銘うった書物においては当然のことながら本書によってはじめてフレーゲの思想に接するという人も多いことであろう。したがって、説明項目を多少減らしてでも一項目あたりの説明量を増やすことも可能な選択の一つであるように思われる。

その限りで本書によってフレーゲ哲学への入門を図ることは初学者にとり必ずしも容易ではなく、むしろ、評者自身の体験から言えば、著者の旧著である『フレーゲの言語哲学』（勁草書房、一九八六年）のような純然たる専門書による方がフレーゲの学説への接近がよりたやすくなるようにも思われる。ただしこの接近法には大きな落とし穴がある。というのも、これまでのところフレーゲの学説が哲学の業界で喧伝されるときには、意義（Sinn）と意味（Bedeutung）の区別などがその典型例であるが、言語哲学上の考察への偏りが一般的傾向として生じており、この傾向は、これらの考察に際してフレーゲを動機づけていた関心が何であったのかというコンテクストを見失わせることになりかねないからである。このようなコンテクストへの了解を欠いたままでは、テキストの読解に関して断片主義の弊害が容易に発生しがちである。このことは少なからぬ実例によって確かめることができようが、その具体的な指摘はここでは措くとして、伝記的事実との入念な照合によってフレーゲの思想の内的な発展経路を踏査した本書のような仕事が、そのような通弊を取り除くのに役立つことは言うまでもない。もちろん上記の『フレーゲの言語哲学』や飯田隆『言語哲学大全Ⅰ』（勁草書房、一九八七年）のような言語哲学中心のフレーゲ研究書がこのような探求のコンテクストへの配慮を欠いているというわけではないのだが、そのような配慮はあくまで補足説明の追加といったかたちに留まるのに対して、本書ではフレーゲの内的な関心の展開そのものが論述の主題となっているという点に大きな違いがある。

また、フレーゲがそのつどの考察において何に関心をもち、何に関心をもたなかったかを理解することはフレーゲの洞察の有効射程を見極めるうえでも重要である。それはフレーゲがその生涯をかけて探求した主題が何であったのかを念頭におくことでもある。言語哲学的洞察はフレーゲ本人にとって論理学研究の副産物にすぎなかったというのは言い過ぎであるが、第一義的な関心の対象ではけっしてなかったという事実は、われわれがフレーゲの思想を理解しようとする際に忘れられてはなるまい。たとえば概念形成に対する判断の先行性を唱える「判断優位説」（十三頁）はフレーゲの言語哲学全体の性格を特徴づける大前提であるが、フレーゲ自身が語るところによれば、これはむしろ論理学への貢献として捉えられるべきものなのである。

そうすると、言語哲学上の洞察とこんにち目されるようなさまざまな着想に関しても、そもそもフレーゲがその洞察を活用して何を達成しようとしていたのかを踏まえて評価されるべきことになる。たとえば、フレーゲが陰影（Beleuchtung）ないし色合い（Färbung）と呼ぶ言語理解の側面や、さまざまな力（Kraft）の類別、通常の文脈と間接的文脈の区別などといった、著名な「意義と意味」の区別と平行してフレーゲが導入したさまざまな概念上の区分は、フレーゲが何を主題的に論じようとしているかと同様に、議論の土俵から何を排除しようとしているかをも指し示している。ありていに言えば、フレーゲは彼の論理学にとってさしあたり考慮する必要のない契機については立ち入った追究を差し控える傾向にあったし、またその論理学研究自体も全般的に見れば算術の基礎づけというただ一つの課題の達成に向けて照準されていたと言いうる。意味論を含む論理体系の構築にあたってフレーゲの行なったさまざまな選択のゆえんは上記のような事情を踏まえて初めて了解可能となる。したがってまた、まったく別個の目的のためにその達成手段として彼の論理体系が考案されたのだと仮想すれば、その場合にはたとえば論証の評価において言明の時制や発話の脈絡への可感性が反映されるなどといった、現実のそれとは別種の選択が行なわれていたこともありうる。このような関心のもとに本書を紐解くとき、明敏な読者は現代哲学・論理学分野での基礎的な問題に関してフレーゲがいかに多くの決定

を下したかに驚嘆するだろう。また、その態度決定がいかに根強くわれわれの思考にいまなお影響を及ぼしつづけているかに気づいて一驚を喫することでもあろう。

分析哲学と称される思想的潮流においてとりわけ顕著なように、フレーゲの考案した概念装置や議論の手法はいまや思考の道具としてごく自然に活用されているため、それらを活用するにあたってはもはやフレーゲの名を意識することすら稀である。言うまでもなくこれは、道具というものの特性上、開発者のもともとの意図なり関心なり構想なりを離れて独立に活用することが可能であるからである。つまりは道具としての概念装置の有用性や議論の妥当性が歴史的コンテクストの忘却によってただちに損なわれるわけではないということだ。このような事情からみてとられるべきことは、われわれがフレーゲの遺産をフレーゲの中心的関心ではなかったような、たとえば言語現象一般の解明といった主題のために有効活用しようとすればするほど、もともとのフレーゲの意図にはそぐわないしかたでの利用を余儀なくされる公算が大きいということである。ただしこの事実の指摘によって評者の言わんとすることは、われわれが襟を正してもっぱらフレーゲその人の関心に則して探求を行なうよう胆に銘ずべきだということではもちろんなく、むしろフレーゲその人の思惑はどうであれフレーゲから学ぶべきことは学びつつも、あくまで自律的な問題関心にしたがってフレーゲの遺産を継承すべきだということである。

もちろん、フレーゲがどのような歴史的・文化的状況に身をおいて自らの関心を育んでいたかという消息を知ることは、遺された著述からフレーゲその人の真意を推し量るうえでほとんど不可欠となろう。しかしながら、このような著述者の真意に忠実なテキストの読解と、歴史的遺産の有効活用を図るためのテキストの合理的再構成とが、つねに軌を一にするとは限らない。たとえば、著者はフレーゲ研究の泰斗ダメットとともに『算術の基礎』六十二節の冒頭箇所をもって、「認識論的・存在論的問題構成を言語哲学的・意味論的設定へと［……］転轍」させる、いわゆる「言語への転回」を先導する古典的箇所」とみなす（一五三―一五四頁）。評者にはこの読解自体を取り上げて異を唱えるつもりは

ない。だが、テキスト上の証拠に関して言えばフレーゲの残した証言は実際にはきわめて乏しく、また、この「転回」の是非について一般的なかたちで考察した直接の痕跡と解しうる箇所も『算術の基礎』を含めてさしあたり見あたらない。そうすると、もしフレーゲがどれほど限定された関心のもとであれ、言語への転回にあたるような着想を自覚的にもち、ダメットの言うようにこの着想が自身の構想にとりどれほどの重要性をもつかということをも明瞭に理解していたとするのなら、なにゆえフレーゲはその正当化のために多くを語ろうとしなかったのかは説明を要することになる。フレーゲがそう考えなかったと言いたいわけではない。それは歴史の謎である。新史料の発見がこの読解の当否に決着をつける可能性は常に残されている。現時点で確かなことは、実際のフレーゲの思惑がどうであれ、『算術の基礎』をそのように読むことはこのテキストを生産的に読む一つの仕方であるということだ。

評者の提出したい論点を明確にするために本書からもう一つ例を引こう。フレーゲの真理論を解説した箇所で著者は次のように述べている。「しかしフレーゲは晩年興味深いことを述べている。「「真」という語は、そもそもいかなる意義(Sinn)ももたないのだと考えるかもしれない。だが…「真」という語は、それが述語として現れる全体の文の意義に、いかなる貢献もしないような意義をもつのだ」(NS 271)。するとフレーゲは、「真理余剰説」には与せず、「真」という述語の意義とは、ある思想から当の思想へと写像する同一性関数であると解していたのである」(一五八頁)。引用が入れ子状になっているためいささかわかりづらいかもしれないが、著者が引用しているのは「論理学上の私の根本的洞察」と題されたフレーゲの遺稿中の一節である。引用中の省略箇所は、もともとは「しかしもしそうなら、「真」が述語として現れるような文にもまたいかなる意義もないことになろう。われわれは次のように言いうるのみである。」となっている。遺稿中のこのくだりはむろん著者のように読むのが生産的であろう。つまり、真理論の展開にとり興味深い着想が萌芽的にであれ含まれているのだと。評者はこの読解および著者による再構成の合理性にここで異議を唱えたいわけではない。そうではないが、次のような可能性を排除することはおそらくはできない。すなわち、フレーゲはことによる

と、真理述語が意義を欠くことから、意義に関する彼の教説にしたがって真理述語を含む文全体が意義を欠くことになるという帰結を引き出し、この結論を避けたいがためにやむを得ず、文全体の意義に貢献しないような意義を真理述語はもつと認めたのかもしれない。つまりこの最後の主張はフレーゲが積極的に提示したかったことではなく、しぶしぶ認めたにすぎないのだということが後々判明するかもしれない。それゆえここでは、かつて柴田正良が述べたように、歴史的事実としてのテキストの執筆者の意図のありかと「理論として合理的に再構成された哲学説」とをきっぱりと区別すべきなのである（「ある論争のかたち」、飯田隆編『ウィトゲンシュタイン読本』（一九九五年、法政大学出版局）所収、を参照）。

最後にひとつだけ本書に関連して語っておきたいことがある。第四章の記述によると、フレーゲ生誕の地であるヴィスマールにはフレーゲの名を冠した公園がかつて存在したが現在では改名されてしまったとのことである（三十一―三十四頁）。たしかに通りや建物や広場にその人の名を冠することも、巨大な像をつくって拝むのと同様、故人の事績や遺徳を称える一つのやり方ではあろうが、評者にはそれが偉大な思想家の労に報いる適切な方法であるようにはとうてい思えない。またフレーゲ自身が、そのような仕方で自らが称えられることを好ましいと感じるような人物であろうかどうかも疑わしい。業績はそれにふさわしいしかたで称えられるべきである。その人が世俗的な栄耀をひたすら求めて思索を重ねてきたというのならいざ知らず、そうではないならば思想家はむしろ自らの思想が後代の人びとによって理解され、その価値が正当に評価されることをこそ望むであろう。おそらくフレーゲもその例外ではあるまい。それゆえフレーゲの事績を称えたければ、その思索の成果を伝えるべく努力するべきである。その努力とは典型的には全集を編んだりフレーゲについての研究結果を公表したりすることであろうし、こんにちであれば、さまざまな現実的制約はあるものの、テキストや研究結果の蓄積をデータベース化してインターネット経由でアクセスできるようにするといった方法も考えられる。この点に鑑みれば、本書のような仕事によって一般の読書家がフレーゲ思想の全体像にたやすく接す

ることができるようになったのはたいへん歓迎すべきことと言える。著者野本は、先年完結した『フレーゲ著作集』全六巻（勁草書房）の編纂をはじめ、過去四半世紀以上にわたり一貫してわが国のフレーゲ研究を精力的にリードしてきた功労者だが、本書の公刊を多年にわたるそのような献身的努力によりたどりついた到達点の一つとみることもできよう。著者によるフレーゲ研究が今後よりいっそう進展するよう願ってやまない。